

遠藤（岩野）清子

長谷川時雨

青空文庫

それは、華^{はな}やかな日がさして、瞞^{だま}されたような暖^{あつた}かい日だった。
遠藤清子の墓石^{おほか}の建ったお寺は、谷中^{やなか}の五重塔^{ごじゅうのとう}を右に見て、
左へ曲った通りだと、もう、法要のある時刻にも近いので、急いで家を出た。

と、何やら途中から気流が荒くなつて来たように感じた。

「これは、途中で降られそうで——」

と、自動車の運転手は、前の硝子^{ガラス}から、行く手の空を覗^{のぞ}いて言つた。

黒い雲が出ている。もつと丁寧にいうと、朱のなかへ、灰と、黒とを流しこんだような濁りがたなびいている。こちらの晴天とは激しい異^{ちが}いの雲行きだ。

赤坂からは、上野公園奥の、谷中墓地までは、だいぶ距離があるので、大雨^{たいう}には、神田^{かんだ}へかかると出合ってしまった。冬の雨にも、こんな豪^{ごう}宕^{とう}なのがあるかと思うばかりのすさまじさだ。

私はすっかり湿っぽく、寒っぽくなってしまうて、やがてお寺へ着いたが、そこでは、そんなに降らなかつたのか、午前中からの暖かい日ざしに、何処^{どこ}もかも明け放したままになって、火鉢^{ひばち}だけが、火がつぎそえられてあつた。

その日のお施主^{せしゅ}側は、以前^{もと}の青鞥^{せいとうしや}社の同人たちだった。平^{ひらつ}

塚^からいてう、荒木郁子^{あらきいくこ}という人たちが専ら肝^き入^いり役^{やく}をつとめていた。死後、いつまでも、お墓^{はか}がなかった遠藤清子^{きよこ}のために、お友達^{ともだち}たちがそれを為^なした日の、供養^{くよう}のあつまりだった。

会計報告^{かいけいほうこ}が、つましやかに、秘^ひ々^{そひそ}と示された。ずっと一^{いちぐ}隅^うによつて、白髪^{しらが}の、羽織袴^{はかま}の角^{かく}ばった感じの老人と、その他^{ほか}にも一^{ひと}、二の洋服の男^{おとこ}がいたので、その人たちへの遠慮^{えんりょ}で、後^{あと}のことなどの相談をした。会費と、後々^{のちのち}の影向料^{えいこうりょう}とがあつめられたりした。

やがて、本堂へ案内された。打揃^{そろ}つて座についたが、本堂は硝子障子が多いので、書院よりは明るいが、その冷^{ひえ}はひどかった。読経^{どきよう}もすこしも有難みを誘わなかったが、私は、眼の前の畳の

粗い目（あら）をみつめているうちに、そのあたりの空間へ、白光りの、炎とも、湯気（ゆげ）とも、線光とも、なんとも形容の出来ない妙なものが、チラチラとしてきた。

——遠藤清子さんは悦（よろこ）んでいるだろう。

たしかにそうも思いはしたが、それよりも、急に、わたしの胸を衝（つ）いてきたものがある。廿五年の歳月は、こんなにもみんなを老（お）わしたかと——

誰の頭髮（あたま）にも、みんな白髪（しらが）の一本や二本——もつとあるであろう。その面上にも、細かき、荒き、皺（しわ）が見える。

ひとり、ひとりが、焼香に立った。

悪寒（おかん）が、ぞつと、背筋（せすじ）をはしると、あたしはがくがく寒がった。

雨のなかを通りぬけて来た時からの異状が、その時になって現われたのだが、すぐ後^{うしろ}にいた岡田^{おかだ}八千代^{やちよ}さんがびっくりして、

「はやく、火鉢のある方へ行かなければ。」

と案じてくれた。生田^{いくた}花世^{はなよ}さんも、外^{がい}套^{とう}をもつて来ましようか
といってくれた。

みんなも気がついて、向うへ行つていよとすすめる。焼香もす
ましているの、あたしは親切な友達たちのいう言葉にしたがつ
た。

外套にくるまって、火鉢^{かじ}に寄りついていっていると、どんなふうかと
案じて来てくれながら、そうではないような様子に、

「おお寒い寒い。」

と、自分も逃げて来たように言つて、八千代さんはそこらの障子を閉めてくれて傍へ来た。

「どう？ お寺で風邪なんぞひいたらいけないから。」

あたしは大丈夫と言いながら丸くなつて、友達の顔も見なかつた。見たら、涙が出そうでしかたがない。

みんな、たいした苦勞だ――

と、そればかりを囁むように思つた。みんな、跣足で火を踏んだような人たちだ。今日こんにちの若人たちの眼から見たらば、灰か、

炭のように、黒っぽけて見えもするであろうが、みんな火のように燃えていて、みな、それぞれ、その一人々々が、苦闘して、今日の、若き女人ひとたちが達するというより、その出発点とするとこ

ろまでの茨いばらの道を切り開き、築きあげて来たのだ。いたずらに増ふえた髪しもの霜しもでもなく、欠伸あくびをしてつくった小皺こじわでもない。

——その間に、こんなにも、こんなにも、女人おんなの出る道は進展した——

前の夜よ、あまり生々いきいきしたグループのなかで、何時いつまでもいつまでも話しこんでいたあたしは、あんまり異ちがった仲間のなかについて、たしかに戸まどいもしているのだった。年月などというものを、さほどに意識しない日頃であって、何時いつも若い友達と一緒にたなつていられる幸福のために、かえって、死しにもの狂いであつた誰た彼かれなしの過去に、ひとと、面おもてをこすりつけられたような思ひだつた。

おもて
表面に、はつらつ澆刺と見えるからといって、わかいひとたち青春者が、やはり

世の中へたつのは、多少とも死もの狂いであるのと同様、さきのひ先覚

とたち者も決して休止状態ではない。おなじ時代を歩んでい

るのではあるが、まあ、なんと、今日いまから見れば、そんな些事ことを

——といわれるほどの、何もかもの試練にさらされて来た人たち

だろう——

私は、かみちかいちこ神近市子さんの横顔を眺め、舞踊家林きん子になった、

ひなた日向さんに、この人だけは面影おもかげのかわらない美しい丸鬚まるまげを見

た。

きよ「清も、よろこんでおりましょう。」

と、もとの座についた、白髪あはの老人は、重い口調で挨拶あいさつをして

いられる。

それをきくと、周囲の人がわやわやとして、

「長い間、お心が解けなかったそうですが、いま、お兄さんがそう仰しやったので、これで、仏さまとの仲も、解けて——」

と、いうような意味の言葉を、一言^{ひとこと}ずつ、綴^{つづ}るように言った。

とはいえ、解けあわぬ兄^{きょうだい}妹^いでも、遺骨は墓地に納めさせてくれてあったのを、その人々も知っている。墓を建てたのを、差出したことをしたと思われないうにと、友達たちは老人をいたわるようにいった。

「どういたしまして、よく、あれの心を知ってやってくださる、あなた^{がた}方に、こうして頂いた事は、よい友達をもった、彼女^{あれ}の名

誉で——」

と、兄という人は思慮深くいうのだった。

「あなた方は、彼女あれのことばかりお聞きなさつてでしようが——」

と、老人は、感慨を籠こめて、わたくしも困りましたと言つていた。

そんな事も、よく聞きたいが、老人とわたしの座とは、かなり間がへだたっている。それに、洋服の男子ひとが、その老人の方へむかつて坐つて、何か話しかけているので、老人のいうことは、半分もきこえてこなかった。

「彼女あれも、さぞ、わからない兄だと思つたでございましょうが、わたくしも困りました。わたくしの眼の悪くなつたのも——」

と、黄白きしろい四角い顔の、腫れあがつたような眼まぶたに掌をかぶせて、

「ただいまで申す、殴りこみのようなことを、彼女がいたしましたので——」

新旧思想の衝突——さまざまな家族苦難の一節の、そんなことを話すように、口がほぐれて来たのは、記念の写真をとつたり、お墓へ参ったりしたあと、谷中名物の芋阪いもざかの羽二重団子などを食べだしてからだった。

「それはどんな訳で？」
と、きいたものがある。

「荷物でしたかなんだか、なんでもわたせと、男どもを連れて押かけてくるというので、それならばと、こちらでも、用心して人もいたのですが——戸障子をたたき破こわすような騒ぎで、その時、

あばれもの
乱暴人に眼を打たれました。」

視力も失したとでもいったのか、まあね、という嘆息もまじつてきこえた。

「あ、あすこの——あの時の方ですか？」

後向きの男の人の一人が、そんなふうに言っている。も一人の人は、遠藤氏といって清子さんとは同姓であつて、死ぬきわまで一緒に暮していた人だということを、誰だったか、ささやいていた。

雑誌『青鞥』^{せいとう}や、その他の書籍がひろげられて、なき人の書

いたものが載っているのを、人々は見廻した。しめやかではあるが、わやわやしたなかなので、気分も悪いわたしは、^{ちかま}近間で話し

ている、ほんの一つ二つの逸話しか耳に残らなかった。

「ごく若い時には日本^{にほんがみ}鬘がすきでね。それも、銀杏^{いちよう}がえしに^{きれ}切をかけたり、花櫛^{はなぐし}がすきで、その姿で婦人記者だということだから、訪問されてびつくりする。」

「『二十世紀婦人』の記者でしたろう、その時分は。」

「たしか、東洋学生会の仲間で、印度人に、英語を教えていたでしょう。」

人々の眼には、ずっと若い時分の、遠藤清子さんが話されていた。わたしの眼には、それよりずっと後^{あと}の、大正六、七年ごろ、もう最後に近いおりの、がくりと頬^{ほお}のおちた、鶴見^{つるみ}のわたしの家で会食したおりの、つかれはてた顔ばかりが浮んでいる。

荒木郁子さんが、清子さん母子の墓のことを氣にかけていたのは、清子さんの死後託された男の子を、震災のおり見失なつて以来、十年にもなるがわからないから、その子も一緒に入れて建てたいという発願ほつがんだつた。

郁子さんは、玉茗館ぎよくめいかんという旅館の娘だつたので、清子さんの遺児はその遺志によつて、『青鞥』同人たちから、郁子さんに依託することになった。そして、あの大正十二年の大震災火災のおり、広い二階座敷にいたその子は、表階段おもてばしごの方へ逃げた。郁子さんは、裏階段うらかいだんへ逃れた。表階段おもてばしごの方へ駆けつけた後姿は見たが、それつきりで、どんなに探しても現われてこないのだつた。その子は——民雄たみおは、岩野泡鳴いわのほうめい氏の遺児ではあつたが、当

時の岩野夫人清子には実子ではないという事だった。父にっかないで、清子さんの養子になり、離婚後も母と子として一緒にいた薄命な子だった。

泡鳴氏には、他^{ほか}にも子供は沢山ある。清子さんより先妻のお子、清子さんより後^{のち}の妻の子。だが、清子さんとの結婚が風がわりであるばかりか、その子になっている民雄も、また別の腹に生れている不^{ふしあわせ}幸な子だ。

四十九歳で死んだ岩野泡鳴も、十九年間、わびしく墓^{ぼひよう}表ばかりで、それも朽ち倒れかけた時、やはり荒木郁子さんの骨折りで、昨年、知友によって立派な墓石が建てられた。この人の半獣主義^{せつな}、刹那哲学、新自由主義は、文芸愛好者の、あまりにもよく知って

いることだが、まだ知らぬ人のためにもと、昨年建てられた石碑の、碑文は、尤も簡単でよく述べられているから、それを記しておこう。

岩野泡鳴本名美衛よしえ、明治六年一月二十日あわじのくにすもと淡路国洲本に生る。享年四十八歳、大正九年五月九日病死す。爾来墓石なきを悲み、友人相寄り此処にこの碑を建つ。泡鳴著作多く、詩歌しいかに小説に、独自の異才を放つ。その感情の豊饒ほうじょうと、着想の奇抜は、時人を驚せり。その表現の率直なるは善良なる趣味性そこなを害ふの感あるも、誰も泡鳴の天賦を疑ふものあるを聞かず、彼が文学的円熟期に入らずして死せるは、最も惜しむべ

きものとす。泡鳴初め浪漫主義を信じ、転じて表象主義に入り、再転して靈肉合致がっちより本能の重大を力説して刹那主義なる新語を鑄造せり。泡鳴は人生の神秘を意識し、その絶対的單純化に依よる生活力の充實を期せるものなり、遂ついに彼は、その信念を進めて新日本主義となせり。思ふに泡鳴は、一時代先んじたるものにして、將まさに來きたらんとする時代を暗示せり。碑文はヨネ・ノグチ氏の撰である。（句点は仮に読みやすいように筆者が入れた。）

死ぬること愚おろかなりといひて

高笑ひ君はまことに

命惜しみき

泡鳴子をおもうと、かんばらありあけ蒲原有明氏の歌も刻されてある。

かくのごとき文人と、その最も、思想的にも人間的にも精悍せいがんであつたであろう時期に、深い交渉をもつたのが遠藤清子なのであつた。

一方に泡鳴氏が、一風も二風もある、風変りの人であるのに、彼女もまた、一通りのものでない考えを、恋愛と結婚についてもつていた。それがまた、潔癖すぎるほどに堅固に霊の結合をとなえ、精神的な融合から、性の問題にはいるべきだと、実に、きびしすぎるほど真面目まじめに、彼女自身への貞操を守っているのだつた。彼女は、泡鳴氏に結婚を申込まれる前に、五年間もある人を思

つていて、そして失恋している。プラトニックラブにやぶれた彼女は、国府津こうづの海に入水じゅすいしたほど、「恋」に全靈的であり、彼女は事業も名誉も第二義的のもので、恋を生命としていたものは、それに破れば現世に生きる意義を見出せないとまでいつている。そして、その最初の恋を、心の底にいつまでも宿していた。

彼女は、明治末期の、女性覚かくせい醒期に生れあわせて、彼女は大きな理想のもとに、それまでの女性とは異なる、生活方針を創造しようとした。我国において最初、覚醒運動を起した仲間の一人なので、彼女は彼女のゆく道を正しく歩もうと闘たたかったのだ。その理想主義者——泡鳴にいわせればローマン主義者の、愛の闘争は、破れたといっても決して敗北とはいわれまい。

そこへ忽然と現われたのが、半獸主義を標榜する泡鳴だつたのだ。

明治四十二年十二月に、泡鳴は、突然面識もない彼女に、逢いに行つて、二時間ばかりの間、率直に自分の半生の経歴を、告白的にあからさまに語りきかせた。清子はそのおりのことを日記では、泡鳴氏の素行には同感できなかつたが、恬淡な性質には敬意を持つことが出来たと書いている。

その日はそれで歸つたが、五日ほどたつと、泡鳴は二度目の訪問をした。その日は清子の父親が来あわせていたので、

「明日、^{あした}も一度会見したい。実は、重大な御相談があるのだが。」
と言つて歸つていった。翌日は、ちゃんとやつて来て、こんどは

家庭の事情を告白した。

——妻とは名義だけであつて、物質の補助をしてやるだけだから——

「三年以上も絶縁しているのだが、妻の同意がないので、正式の離婚が出来ないでいるだけだ。」

だから、気にかけないで清子に同棲どうせいしてほしい、同時に結婚もしてくれと申込んだ。

午後二時ごろ、お昼飯ひるはんをたべに、麻布あざぶの竜土軒りゅうどけんへ行き、清子は井目せいもくをおいて、泡鳴と碁を二回かこんだが、二度とも清子が敗まけた。そのあとを、二時間ばかり、泡鳴が玉突きをするのを見物していたが、こうした友人づきあいが、すっかり打解けた気

分にはいりこめたものと見えて、幽霊坂の上でわかれる時には、引っこしの話までまとまって、新らしく家を借りる金を十五円泡鳴は清子に渡した。

「愛のない結婚なんて、自身を辱^{はずか}しめることだし、男を欺く罪悪だ。」

と清子は結婚は拒絶したが、一家に同棲して見るのは承知した。

「無論、あなたの人格を尊重して——」
という約束をした。

この約束は、突飛^{とっぴ}なようでもあるけれど、二度の告白で、泡鳴の正直さは、正直な彼女の心に触れたのでもあったろうが、だが、彼女は独りになると机の前で考えこんだ。愛は霊からはいったも

のでなければ本当でない、そして、正しい理智から出発したものでなければならぬという、平常へいぜいからの持論が拒んだ。

——あたしは、あなたに友情以上はもてない。

そう書いて、預かったお金を封入してかえそうとするうちに泡鳴の方から手紙が来た。

勿論もちろん第一条件だけでも拒絶されるよりもよいが、第二条件もなるべく考え直して承諾してもらいたい——そんな文面だった。

「あなたは、樗ちよぎゅう牛を愛読することから来たロマンチスト、僕があなたのロマンチストになるか、君が新自然主義になるか。」

泡鳴はそんなふうにもいったが、とも角かく共同生活にはいる話は、手つとりばやく纏まとまったのだった。

それまで、彼女は、五年間ばかりいた赤坂ひのきちよう櫓町十番地の家を引き払うことにしたので。拾った猫で、よく馴なれているのがいたが、泡鳴が厭きらいだというので、近所へあずけてまで行くことにした。たしかに清子は、泡鳴に引かれたものであつたには違いない。

その前年かに、泡鳴は小説「耽溺たんでき」を『新小説』に書いている。自然主義の波は澎湃ほうはいとして、田山花袋の「蒲団ふとん」が現れた時でもあつた。

ここで、泡鳴と清子の、不思議な生活がはじまることを書こうとする前に、婦人解放の先駆、青鞥社の文学運動が、男の連中をも、かなり刺激したことを思出した。生田いくたしゅんげつ春月さんが、花世はなよ

さんに求婚したのも、そんなふうな動機だった。

そしてまた、そのころは、自由劇場が、小山内さんおさないによつて提唱され、劇運動の炬火きよかを押出した時でもあつた。

偶然といえ、今、わたしが机にむかっているところは、赤坂檜町である。十番地は乃木坂のぎざかのちかく、わたしの住居すまいの裏の崖がけの上になつてゐる。いま、音楽家の原信子はらのぶこの住んでゐるところとの間になつてゐる。あたしが、はじめに赤坂の家から遠藤清子のお墓にゆくところを書きだしたのも、ふと、その事を思ったからだ。しかも、泡鳴が清子を訪れたのは十二月の一日がはじめてで、十日にはもう大久保おおくぼへ移転ひっこしている。

今日は、昭和となつてから十二年、もつとも画期的な年の、南ナ

ンキン
京陥落をつげたその十二月であり、暦は廿二日だが——新劇運動の親、小山内薫氏かおるのなくなつたのも、クリスマスの晩で、十年前のこの月廿五日の宵よいだつた。そして、自由劇場再進出の計画が、いちかわさだんじ市川左団次によつて実現されようとしている。

私は、霜白き暁を、多少の感傷をもつて默然もくねんとしている。

二

テトテトと、暁の霜に冴さえるラツパの響きに、眠りついたばかりの床とこのなかで、清子はうつすら眼をさました。

歩兵一聯隊れんたいの起床ラツパを、赤坂檜町の旧居で聴いている錯

覚をおこしていたが、近くで猫が、咽喉のどを鳴らしている氣もした。

はつきりしない頭のどこかで、猫は近所へあずけて来たはずだ

がと、預けたとはいえ、空家あきやへ残して来た、黒と灰色との斑まだらの毛

並としよりが、老人のゴマシオ頭のように小汚こぎたならしくなってしまうて

いた、老猫おいねこのことがうかんだ。

——あれは、一ツ木ひとぎの縁日へいった時、米屋の横の、溝どぶつぷち

に捨てられていたのを拾ってやったのだが、また宿なしになつてしまやしないかしら。

泡鳴氏きらが汚ながるし、厭きらいなので、捨てて来はしたが——

と、そう思うと、引越しのとき、山のように積んだ荷車の、荷物ふるひしやくの上へせっかく捨てた古柄杓ふるひしやくを、泡鳴氏は拾って載せた——

あんなことをしなければ好いのにと、見ないふりをして眼を反らしたが、冬の薄ら陽が、かたむきかけたのを瘦せた背に受けて、古びしやくを拾いあげて荷物の上にさしこんでいる、厭だつた姿が、まぶたの上にはつきりとした。

「あ、赤坂の旧家じゃない。」

パツチリと眼がさめると、猫だと思つたのは、隣室から、男のいびきがきこえていたのだった。

ラツパの音は、戸山学校からきこえてくるのだった。大久保の新居に来ての朝夕、馴染のない場処でありながら、赤坂に住んだ五年間と変らないのは、陸軍のラツパの、音をきくことだけだった。

——もう、やがて、二十日ぢかくにもなる——

目がさめさえすれば、妙にしよんぼりと、越して来た日のことが、目に浮ぶのが、この頃のならわしになつていて、十二月九日に泡鳴氏と、此処ここに同棲どうせいしはじめてからのことが、またしても繰返して思いだされるのだつた。荷物を出してから、二人して来たこの家に、家主やぬしのところから提燈ちようちんを借りて来て、二人は相對ひえびえしていた。冷々ひえびえした夕闇ゆうやみのなかで、提燈かかを抱えるようにして暖まったり、莧タバコを吸つたりして荷物のくるのを待った。

蕎麦そばで夕食をすませると、もう荷物も着くだろうと、家のなかを見廻して清子は言つた。

「とにかく、同棲しても、まだ友人関係なのですから、あたしの

寢間ねまは、此処を茶の間にして、そっちの六畳ときめますから。」

「では、僕は、八畳の方か。あすこ、客間だね。」

と泡鳴氏はいった。二人は寒い、なんにもまだ置いてない室へやに眼をやった——その寢間から、いびきは洩もれてくるのだった。

「あんなに、泣いたり、怒ったりしても、よく寝られるものだ。」

清子は毎夜のように持ちあがる、二人の間の暗闘——許す、許さぬの絡からみあいを思った。俺おれは腹を切るといつて怒るかと思えば、これほど熱愛を捧ささげる誠意を酌くまないのかと泣く男が、枕まくらにつくと、ぐっすりと寝てしまうのを、不眠症になってしまつて、朝まで眠れない自分とを思いくらべた。

——けれど、だんだん私は岩野を好きになっている。

と思わないわけにはゆかない。けれど、恋愛の芽もまだ宿してはいないと、心で頭は横に強く振った。

そんなことを思う傍らで、まだ移転の日のつづきを思い出しているのだった。翌日に着いた泡鳴の荷物は、荷車に二台の書籍と、あとは夜着と、鉄の手焙りだけだった。

「僕は、なにしろ、蟹の缶詰で失敗したから、何にもない。洋服が一着あるのだけれど、移転の金が足りなかったから、質に入ってしまった。」

その費用の幾分でも、分担しようと、清子が銀時計を出すとき、「君の品なんぞ出さなくなつたって好い。何しろ、樺太で、蟹の缶詰で一儲けしようと思ったのだが——蟹はあるが、缶の方が

うまうまいかなかったんだ。」

彼はてれくさく、笑いながら言った。

——良いところのある人だ——

清子は頬^{ほお}をおさえた手に、頬骨がさわる気がした。毎朝見る鏡に、眼ばかり大きくなってゆくのがわかるのだが、こう段々に、夜が苦しいものになって来ては堪^{たま}らないし、眼のさめた瞬間の心さびしさも、朝々ごとに、たまらないものに思った。

腕力をもつてくるなら、反抗する決心もあるが、沁^{しみ}々と訴えられるのは愁^{つら}い。自分の思想を守るのに、そんなことで屈伏したり、陥落は出来ないとも思った。

最初の「霊の恋」の対^{あいて}手の男は、もう、すっかり醒^さめてしまっ

ているのに、

「あなたは、泡鳴氏と、もう結婚したのですか。」

と、この同棲の新居へ訪ねて来て言った。

「どうとも、あなたの御想像にまかせます。」

と答えただけで、並んで月を見た。泡鳴もそれを見ていた。あとで嫌味をいったが、十月の冬の月は、皎々しろじろと冴え渡っていた。

お互の胸は、月と我々との距離だけの隔りを持っていると、その時はつきりそう思った。その男への執着でなく、霊の恋の記念のものだけが焼きすてかねて、再び見まい、手にも触れまいと、一包にくくって、行李こうりの底に押籠おしこんでしまった。

——だから、言って見れば、泡鳴に、霊の恋が芽生めえさえすれ

ば好^いいのだ――

けれど、それは、半獸主義を標榜する人に無理はわかつてい
る。といつて、それがそうならないからこそ、もろともに悩^{うめ}み呻^め吟^めく
のではないか――

彼女は、窓の外^{のきば}の、軒端で笑っているような、雀^{すずめ}の朝の声をき
くまいとした。蒲団^{ふとん}をひきかぶるようにして、外は、霜柱が鋭い
ことであろうと思つた。なにかもが、きびしすぎると感じなが
ら、自分の主張は曲げられないと、キツシリと眼を閉じていた。
見かけだけは仲^いの好^いい、新婚夫婦に見えて、靈肉合致^{しのぎ}の域にいた
るまで、触れさせまいとする闘いに、互に心肉の鎬^{しのぎ}を削っている、
妙な生活！

去年の今ごろ（明治四十一年）は、日本婦人の権利擁護のために、治安警察第五条解禁の運動に朝から晩まで駈^かけ廻^{まわ}っていたものだが、今年は肉と霊との恋愛合戦に、血みどろの戦いだ！

彼女は、首を縮^{すく}めて、ふとんをかぶると、大丸髻^{おおまるまげ}が枕にひっかかった。

＊

許す許さぬの解決はつかないままだが、日が立つにつけ、この同棲生活の厳寒も、いくらかゆるんで来た。いらいらした霜柱も解けかけて来た。杉の木の下、三本あつた庭には、赤坂からもつて来た、乙女椿^{おとめつばき}や、紅梅や、海^{かい}棠^{どう}などが、咲いたり、蕾^{つぼみ}が膨^{ふくら}んだりした。清子の大好きな草花のさまざまな種類が、植えられ

たり種を播まかれたりした。

「まあ、あなたが、そんな事して下さるようになったわね。」

と清子がいうように、泡鳴氏が土をいじっていることがある。文壇の交友たちの話をきくことも多くなつて、清子も小説を書こうと思いたつたりしはじめた。

一ツ石シャボン箱ばこをもつて、連立つれだつて洗湯おゆにゆくことも、この二人

にはめずらしくはなかつた。男湯の方で、水野葉ようしゆう舟ふねや戸川秋し
ゆうこつ

骨 氏と大声で話合っているのを、清子は女湯の浴槽ゆぶねにつかつ

てのどかにきいていることもあつた。今日も、一足おくれて帰つてくると、家のなかで女の声うちがしていた。

「いま現金がないから、そのうち金のある時に返すといっている

のに。肯きかないのか。」

と、言っていたが、

「さあ、これが証文だ。」

何か書いて渡している様子だった。帰してしまうと、六畳の部屋へ顔を差入れて、化粧をしている清子の鏡のなかへ、自分の顔をうつしこんだ泡鳴は、

「彼女あれだよ、放浪（小説）のモデルの女は。缶詰事業のとき、彼女あれの着物も質に入れてしまったので、返してくれといって来たのだ。金がなければ、証文にしろといって、持っていた。」

清子は、今帰っていった女のことなどは、あんまり気にならなかった。鏡にむかって、鬢びんを掛きながら、思ひだしていたのは、

いつぞや、此処へ来て間もなく、やっぱりお湯から帰つてくると、主客の問答を、ふすまご襖越しにきいた。

「まだか？」

「まだだ。」

その時の客は、まさむねはくちよう正宗白鳥氏だったのだ。泡鳴氏の友達の方

には、もつと手厳しいのがあつて、ハガキで、そんなことをして
いて、清子に男が出来たらどうするとか、彼女は生理的不具者な
ので、よんどころなくそうしているのだろうなぞといつてきてい
るのもあるのだった。

清子には、そんなことはなんでもない非難だと思えた。それよ
りも辛抱のならない女客があることが厭いやだった。それは、泡鳴氏

の先妻幸子さちこだ。三年前から別居しているという彼女は、冷やかな調子で、

「私は、貰もらうものさえ貰えば好いんですからね。どうせ、この夫ひととは気が合わないんだから、この夫ひとはこの夫ひとで、勝手なことをなさるがいいんです。あなたとは、気があっているそうだから結構でさあね。」

永遠性を誓えない邪恋おしのを押退け純一無二のものでなければならないと、賤いやしむべき肉の恋をこぼんで、苦しむ身に投げつける言葉のそれは、まだ忍耐がまんするとしても、名ばかりの夫妻とはいえ、夫が嚴冬の夜よも二時三時まで書いていることを、この女は知らないのだろうか、文学家の朝ちよう夕せきは、思ったより悲惨なものであ

るのに、その金を催促に来て、という言葉がそれなのだ。

——あの、賤しい女に、何で、わたしは見下げられるのだ——
と、ふと、そのことを、いま、帰っていった、襖ふすまの向うの女の声から、連想を呼び出されていたところだったのだ。

「なにをぼんやりしているのさ。」

泡鳴氏は、はりあいなさそうにいった。

「ふん、これね、なんだか冷たい恋のようで、わたしたちに似ているから。」

と、清子は心にもないことをいって、はぐらかして、生けてあつた連翹れんぎょうの黄色い花を指さしたが、鏡の中に、陰気くさい、気むずかしい顔をしている自分を見出すと、彼女は、またしても家

のなかの空気を暗くしてしまう自分を、どうしようもなくなつて、
 氣をかえに散歩にでも一緒に行こうと、立上ると、八畳の部屋を
 覗^{のぞ}いた。すると、泡鳴氏は後むきになつて横になつていた。清子
 はその背中から、悶^{もんもん}々としてゐる憂愁を見てとつた。

*

「僕はもう諦^{あきら}める。僕にそういう心を起させるものを切りすてる。
 泣くには及ばない。」

せせぐり泣く枕^{まくらもと}許で泡鳴はそういった。そんな事をさせて
 はならないと、二十八歳の処女は泣いたのだ。とはいえ、二ツの
 思想が同棲してゐる以上、この争^{あらそい}鬭はくりかえされなければな
 らない。

彼女は、どうかすると早起はやおきをして、台所に出たり、部屋の大掃除をしたり、菜漬なづけをつけたりする。と思うと、戸山が原へ、銀のような色の月光を浴びにいったりする。「別れたる妻に送る手紙」という小説を書いた、近ちか松まつ秋しゅう江こう氏に同情して、この人のロストラブの哀史を、同情をもつて読んでみようと思ったりしていた。

立場の違う苦しみに、互に、弄なぶり殺しのような日をおくりながら、二人の相愛の気持ちは日々に深まっていったのだった。日記をつけるのにも、岩野氏とか、泡鳴氏とか書いたのが、「君」となったが、三月ばかりするうちに、主人あるじという字になった。

「あの女ひとって、随分失礼ひとな女だ。不作法ふさぽうだったってなんだって、教

養のある婦人ひとだというのに、いつだって案内もなしで、いきなり上りこんでくるなんて我慢が出来ない。」

彼女は先妻の幸子が、いつもの癖で、ずかずか上り込んで来て、例いつものくせで、朝、起きはぐれているところを、荒い足音で、わざと目をさまさせられたのをいきどお憤った。

中学教師をしていた時代の泡鳴と、女学校教師だった幸子とは、泡鳴が樺からふと太へ蟹の事業をはじめる前に別れたのだが、清子は友人同棲をはじめてからも、幸子に同情して、泡鳴に復帰するようにさえ勧めたこともある。米や炭を送って、幸子の生活をたすけもした。それなのに、何時いつも来ると、自分が退のいてやっているのだぞといわないばかりの仕打ちに、清子は腹を立てた。

だが、そんな不愉快な日ばかりもなかったのは、若葉の道を蛇^{じゃ}の目傘^{めがさ}をさしかけて、連れ立って入湯^{おゆ}にゆくような、気楽さも楽しんでいる。

——主人^{あるじ}の体量、万年湯ではかつたら、十四貫三百五十目^めあったといつて、よろこんでいらつしやつたと、日記につけたりしている。

暑い晩に、泡鳴は半裸体で原稿を書き、彼女は傍^{かたわら}でルビを振っている。と、青蛙^{あおがえる}が飛び込んで来た。泡鳴は団扇^{うちわ}で追いまわし、清子も手伝った。灯^ひによつて来た馬追虫^{うまおい}もいる、こおろぎもいる、おけらもいるという騒ぎに、仔犬^{こいぬ}もはしゃいで玄関から上つてくれば、飼猫^{かいねこ}も出て来た。虫のとりあいをして、猫がこお

ろぎを食べると、犬がくやしがつてワンワン吠^ほえたてた。

「まるで動物園だ。」

と泡鳴が笑っているという図もあつたりした。家庭生活にそのまま、犬も猫もきらいな泡鳴をひっぱりこみ、浸^ひらせた清子の、一筋でない信念の強さがそれでも知れるが、そればかりではなかつた。泡鳴は、そうした和^{なご}やかな団^{だんらん}欒^{らん}には、勸進帳をうたつたりなんかして、来あわした妹に、こんなことは兄さんはじめてだと、びつくりさせたりした。

——進んでノラともなれず、退いて半獣主義に同化することも出来ない。恋と思想と一致しない。私たちは常に絶えざる苦悶^{くもん}と懊^お惱^うとを免^{まぬ}かれぬ。しかも君に対する恋の執着はどうするこ

とも出来なくなっている――

それは偽りのない彼女の告白だ。

泡鳴は、金が出来たら広い場処に移つて、鍵かぎのかかる部屋をつくつてあげようといい、結婚式は立派にしようと、優しくいった。けれど、けれど、清子の思想は主張は、強かった。四十三年の一年は、その相剋そうこくをつづけて、四十四年の一月、熱海あたみへの三泊旅行も、以前の関係のままで押通した。

熱海の間かんけつ歇温泉ではないが、この、珍無類夫妻の間には、間歇的に例の無言の闘争が始まるのだった。そして、彼女は終日おし唾になり、泡鳴はいろいろの所作をした。

「泣いたり、怒鳴ったりするのは、まだ悲しみや怒りの極きわみじや

ない。悲痛の極は沈黙だ。沈黙が最も深い悲痛だ。」

と、泡鳴は言つた。

飽満ほうまんの後のちにくるたるみならば、まだ忍べるが、根本の愛の要

求に錯誤があるからだ、彼女は悩みになやみぬいた、その夜の夜明けに、いよいよ気分をかえて、新しく彼を愛してゆこうと決心した。

「理智の判断を捨ててしまつて、盲目に恋に身を投げだそう。そうしたら泡鳴も満足し、自分の淋しさも消えるかもしれない。」
自分をな没くすことは、もっと大きな自分をつくるために必要かもしれないと、彼女は自分に言いきかせた。そして、それをするならば、それは今日だ、この覚悟が崩くずれないうちにと思つた。

打明けるには、快^{こころよ}い顔をしていたかった。気分を軽くするため、晴れた日の下に出た。お友達の家^{うち}で闘球をして遊んで、夕ぐれになって帰るとき、これならば、心から笑って話せると思った。新しい恋人の心持ちで話しあおうと急いだ。はずみきつて玄関から上りながら、旦那さまおうちときいたら、婆^{ばあ}やは、お出かけですと答えた。

清子の勢いこんだ覚悟は挫^{くじ}けてしまった。

泡鳴氏も苛^{いらいら}々々して酒ばかり飲んだ。そして、

「私は不幸な男だ。あなたも不^{ふしあわせ}幸だ。その上、貧乏はする。

さぞ詰らないだろう。」

とつくづく言った。精神的にも、物質的にも、なんとか打破しな

ければいけない。それには、生活をすっかり改^かえるのに、限ると思つたためかどうか、『大阪新報』に入社することになった。後^{あと}から清子も行くことになる前に、音楽家の北村氏夫妻が、新劇団体をつくるのに、女優にならないかと勧められて、清子の心は動いた。

「僕は自分の妻を、公衆^{ひと}に見せるのは嫌^{いや}だな。」
と泡鳴は反対した。それには、うんといわなかった清子も、稽古^{けいこ}を見にいってくると、すっかり厭^{いや}になつて断つてしまった。

*

いよいよ泡鳴が大阪へ出^{しゅつ}立^{たつ}する二日前の、三月廿六日の日記には、

——私の心は黒い夜の森のような、重い空気につつまれている

と清子は書いている。二人で饑^うえても離れて心配するよりいいというような泡鳴からの手紙を読むと、想思の人が東西を離れるようになるとは、ほんとに憂^{うきよ}世ではあるといい、苦勞をともにする人は、呼べど答えぬ百余里の彼方^{かなた}の難波^{なにわ}の宿にいい、すこしばかりの金を手にすると、この金を旅費にして、大阪にゆこうかしら、会いたいのは私ばかりでもあるまいからと、一緒にいれば、争^{あらそい}鬭^{たたか}つづける泡鳴を恋い慕った。蛙^{かえる}の声が気のせいか、オオサカオオサカときこえるともいうようになっていた。

君帰り物語りすと見しは夢、ふとうたたねの春^{しゅん}宵^{しょう}の夢

君住むは西方百里飛鳥の、翼うらやみ大空を見る

と、だらしないほど彼女は恋しさを告白するようになった。

とうとう、婆やを連れて、大阪へ、家財道具そっくり持つてゆく日が来た。

＊

大阪郊外池田山の麓に家居した彼女は、汽車に乗っただけで、郊外から郊外へ移って来たほど気が軽かった。

青菜に靄のかかる宵は、青葉の匂いのはげしいころだった。おなじような郊外の住家というが、二階から六甲山も眺められる池田での生活には、彼女はガラリと様子が一変してしまった。主人が、今朝のお出かけには御機嫌がよかったのに、お帰りになつて

から悪い、私がお出むかえしなかったからだろうか、なんぞというようになった。だが、それは表面だけで、四十四年五月十一日の日記には、

——私は結婚生活に経験がない。始めて男性に心身を許してしまった今日こんにち、私の結婚生活に対する幻影は早くもさめてしまった。古人が結婚は恋愛の墓だといっている。私は、恋人の努力によつて、内外一致した恋愛生活が、真の結婚生活だと信じていた。結婚を葬るのは、当事者の努力が足りないためだと思っていた。しかし、これは私一人のイリュージョンかもしれない——

と、何処どこやらに絶望を噛かみながら、それでも、純一に夫を愛そうと、恋の自伝を書くために、行李こうりの底へ押込めておいた、五年間

もつづけたという霊の恋の、形見の書簡を、陶器せとものの火鉢をひつぱり出して燃してしまった。電燈が薄ぐらく曇る煙りのなかで、泡鳴を揺り起して見せると、

「妙なことをする人だ。急に何を思出したんだ、この夜更よふけに。」
と、もうそんな事には興味ももたなかった彼は、ともすると、

「なにも、いやいやいてもraitakくない。」
というようになった。

*

前号に、荒木郁子さんに養われて、震災の時に死んだ男の子を、清子の実子でないように書いたが、それは、あんまり諸方き訊きあわせたための行きちがいであつた。生田花世さんは、その頃、ペ

ンネームを長曾部菊子といわれたが、芸術まず生活の実行からと、水野葉舟氏の家に女中奉公をされていた。仲のよかった岩野、水野の両家の交わりは、紫紺の釣^{つりがね}金マントを着て、大丸髷の清子女史を伴なった泡鳴氏がお得意の面^{おも}で、

「清子も、とうとう僕の子を、ここへ入れている。」

と、細君のお腹^{なか}をさして、満足氣にいつてたのを見て知っているということだった。

釣鐘マントの流行は大正三、四年ごろだった。その時分に、この夫妻は大阪から帰って、東京巢鴨^{すがもみやなか}宮仲に住んでいた。四年の夏のころ、清子の健康はすぐれていなかったことや、大正十二年に九歳位だということにも合っている。しかも、泡鳴氏が清子さん

に別れる時、

「もう、あなたとも、永久のお別れですね。」

といったとき、泡鳴氏はこういつている。

「おれはそうは思わない。いつ喧嘩けんかして帰って来るかも分らない。それに坊やは時々見にくるよ。」

泡鳴氏は、そのころ、筆記者に雇った蒲原房枝かんばらふさえ（後の夫人のち）

と、不義の交わりがつづいていたのだった。

「蒲原とのことならば、もう一月も前から……が出来てできいたのだが、私はあなたに対する尊敬は、今日でも持っている。」

とその関係を軽い調子で告白したのだった。

それは、清子にとって、重大なことだった。同棲して七年間、

泡鳴の品行に一点の汚点もなくなつたことは、清子の誇りでもあり、泡鳴の誇りでもあつたのだ。多年の放ほうしょう縦生活せいごうを改めたと、家庭の美事びじこうみよう光明が、一瞬にひっくりかえつてしまつたのだ。

清子はその侮辱を、冷静に考え処理しなければならぬと思つたが、昂こうふん奮ふんした。謀反者むほんしやの間まにゐることがたまらなかつた。

蒲原房枝は彼女にこういつた。

「こんな関係になりましたからつて、決して定まつた月給よりほか頂こうとは思つていません。私は、お金をもらつて囲かこわれてゐるようなことはしたくないのです。」

それから泡鳴は、いっそ知れてしまつたのをよい事にして、

夜ごとに公然と、蒲原のところへ出かけて行くようになった。

千仞^{せんじん}の底へつきおとされた気持ち——清子にとって、それよりもたまらないのは、そうなっても夫婦関係をつづけようとする
ことだった。

別居か離別か、その二ツに惑った彼女は、青鞥社^{せいとうしゃ}に平塚明子^{はるこ}
さんをたずねた。

別居する決心がついた。収入の三分の二を渡してもらって、子供を養い、妻としての権利をもつのを条件に、私製証書は二通つくられた。

あんまり事件^{こと}が突然なので、誰も彼もびつくりしたが、岩野氏はあつさり、荷物積んだ車と一緒に、

「さようなら。」

といって出ていってしまった

しらじら
白々しい寂寞せきばく！

彼女はこんなことをいったことがある。

「あたしは芝で生れて神田かんだで育つて、綾瀬あやせ（隅田川すみだがわ上流）の水す

いごう
郷に、父と住んでいたことがある。あたしの十二の時、桜のさ
かりに大火事に焼かれて、それで家は没落うちしはじめたのです。そ
の時の、赤い赤い火事に、幼い心をうたれた紅さと、泡鳴氏が出
ていった夏の日の——八月でしたが、あの真昼の、まっ白な空虚
さは、心からも、眼からもわすれられない。」

＊

その後の清子さんは、切花きりばなや、鉢植の西洋花を売る店をひらいた。

泡鳴氏からの物質は約束通り届けられなかったものと見えた。後には、店の面倒をよく見てくれたり、深切にしてくれた青年と結婚した。大正九年に、その人との中に女の子が生れたので、夫の郷里京都へ、もろもろの問題を解決に旅立ったが、持病の胆石が悪化して、京都帝大病院で亡なくなった。

暮の押迫った時分だった。『青鞥』はもうなくなつたが、新婦人協会の仕事で、平塚さんは東京が離れられなかった。ありつたけの手許の金を送ってやると、

「まあ、あの人も、仕事のことで、いま、お金がなくなつて困つて

いるだろうに、送ってくれるなんて、少しでも、これは実に尊いお金だ。」

と、悦んだが、その時分には死を充分覚悟していて、泡鳴氏との遺児を、友達に頼みたいということを、遺言の第一に書いた。

悲しい結びつきであつた。泡鳴氏にしても、大正四年四月、

「新体詩作法」と、「新体詩史」を合したものを提出して、博士論文を要求していたのだが、審議に上つて^{のぼ}いた時に、清子さんと蒲原房枝とをめぐる事件の、世評がやかましくなつたので、^{ほとん}殆ど通過する間際になつて否定されたということだ。^{まぎわ}

廿八歳まで、霊肉一致の、恋愛至上主義に生きぬこうとした意志の強い女性の、ほんとにこれは、断片を語るにすぎないが、彼

女が、泡鳴氏との同居に、頑固かたくななほど身を守っていた明治四十年は、幸徳こうとく事件があつたりした時だった。

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年12月16日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「婦人公論」

1938（昭和13）年2～3月

初出：「婦人公論」

1938（昭和13）年2～3月

入力：門田裕志

校正：川山隆

2007年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

遠藤（岩野）清子

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>